

timelake

"時間"のイメージはいつの間にか、左から右へ流れていく
Imperceptibly, the image of a "timeline" which flows from left to right

"タイムライン"のイメージが定番となっています。
has become a classic image of "time". Also, the influence of "picture" with

それは、TVドラマやCM、PV、映画などの結末に向かった時間軸の
temporal axes that extend to the endings, such as TV dramas, TV commercials,

ある"映像"の影響や、気軽に動画編集ができるようになったこと、
promotional videos, and movies, along with the ability to edit animations,

さらには、twitterやFacebookなどのSNSの登場によって、
reinforces the image of a timeline drifting to one direction, appearing on SNS

一方向に流れていくタイムラインのイメージは強くなっている
(Twitter, Facebook, etc.). The word "timelake" occurred to me as more accurate

はないでしょうか。"timeline"を一方向に流れる"川"に例えると、
when I compared "timeline" to "river" which flowed through one direction.

それに対して"timelake"という言葉が思い浮かびました。

In other words it is not a one-way flow, and time collects like a "lake". After all,

つまり、一方向の流れではなく"みずうみ"のように時間が溜まり、
this reflects the way time drifts in every direction and merges while disrupting.

あらゆる方向に流れ揺らぎながら混ざっていくような時間のあり方。

By setting a theme called "timelake", we collect new images such as

"timelake"というテーマを設定し、映像と切り離せない時間を意
"the lake of time" which reflects an image and time which can't be separated

識的に扱った、"時間のみずうみ"のような新しい映像作品を集め
consciously. When we show them in public space (daily life space), we might be

パブリックスペース(日常空間)で上映することで、いつの間にか
renewing the images of "time" and "moving image" that already exist in our minds.

ついでに(思い込んでいる)"時間"や"映像"のイメージを
(that we are convinced) (Translation :TSUKAMOTO Yasuko)

更新することはできないだろうか。

福田 真知

FUKUTA Masakazu

【KUNSTARZT】【新風館】

福田 真知 FUKUTA Masakazu



jewel_2013

12min18sec 2013

日常の中で気になる(魅力的な)物事に出くわすことがあります。それは、その感覚だけを残して瞬間的に過ぎ去ってしまいます。そのきらめきをどう定着するかが最近のテーマです。

jewelシリーズは、時間の密度を高めることにより、宝石のようなきらめきを定着しました。



jewel_kusamura



jewel_hikari

<http://masakazufukuta.tumblr.com/>

1983年 岐阜県生まれ。2006年成安造形大学彫刻クラス卒業。主な個展に「Perhaps.This river.」2009(GALLERY wks・大阪)、SURFACE/フンイキ」2012(アートスペース虹・京都)、「jewels」2013(KUNST ARZT・京都)、「ゆらぎのゆらぎ」2014(ギャラリー播・京都)、主なグループ展に 群馬青年ビエンナーレ2012、MECAwered2013、neo-824(The Third Gallery Aya・大阪)などがある。

福田は心惹かれた対象を"時"をかけて被写体とし(数百枚撮影し重ね合わせる)、時間の密度を上げることで、その対象が発するキラメキを定着させる。じわじわと変化するまるで絵画のような映像作品は時間軸を超えた映像作品といえる。

Visions in Time

平田 剛志 HIRATA Takeshi

京都国立近代美術館研究補佐員

「時間として映像」から「空間としての映像」へ。かつて映像は「映画」を意味し、特定の日時・場所で始まりと終わりのある物語やドラマを見るものだった。だが、いま映像は動画とも称され、PCやスマートフォンで視聴、編集、投稿され、街頭ビジョンや液晶モニターを通じて止まることなく「タイムライン」に流れ続けている。

展覧会においても、90年代以降数多く映像展が開催され、近年では映像を見るものからインスタレーション、マルチプロジェクションへ、映像を断片的、複数の、同時に鑑賞・経験する空間へと変化してきた。

今展「timelake」は、京都の複合商業施設・新風館の200インチLEDビジョンとギャラリー・KUNST ARZTの2会場で開催される映像を中心とした展覧会である。新風館では12時間の上映プログラムが生まれ、ベテランから若手作家まで21名の作品が上映、KUNST ARZTでは5名の作家による平面・立体作品の展示が行われる。

本展キュレーションの福田真知は、「timelake」を「"みずうみ"のように時間が溜まり、あらゆる方向に流れ揺らぎながら混ざっていくような時間のあり方」と定義している。福田は「時間」を一方方向に流れる川ではなく、みずうみのように「溜まり」「揺らぎ」「混ざる」あり方として捉えているのである。

ここで「timelake」のコンセプトを理解する一助として、福田の作品について知る必要があるだろう。そこには、作家の関心がコンセプトに反映しているからである。

福田作品の特徴は、物質や映像を切断・加工・編集することで本来とは異なる時間軸・時間層を視覚化することである。ひとつの枝を複数に切断し、アトランダムにつなぎ合わせた《ニュータイムライン/グレードエスケープ/枝》(2013)、女性の後ろ姿を撮影した写真を重層的にレイヤー加工した映像作品《jewel》(2012)、定点観測した川の写真データを一つの川へと再構成した《river-river》(2013)などがある。福田は複数の瞬間・時間の「キラメキ」を再構成、反復・持続させることで映像を「流れる」ものではなく、「みずうみ」のように溜められたイメージとして創造するのである。つまり、福田の映像は、瞬間の持続としての映像である。だからこそ、タイムラインのように流れるのではなく、「始まりも終わりもない時間」として「みずうみ」を志向するのだ。

出品作品・作家にはこのような福田の作品・関心が反映されている。KUNST ARZTでは見えない「制作の時間」を可視化・視覚化した作品が特徴的である。柵瀬茉莉子は、自然の木材片に金糸を縫う行為によって「時間」が可視化される。

芳木麻里絵は、レースや菓子など日常的なモチーフを素材にしたシルクスクリーン作品である。「版画」らしからぬ立体的な厚みは、インクを何層も重ねた行為・持続の時間＝みずうみの厚みである。

新風館では複数の映像や場所、時間、音声を編集・再構成した作品が多い(大坪晶、岡本光博、小沢裕子、つかもとやすこ、夏池風凧、端地美鈴、林葵衣、林勇氣、吉田周平等)。

さらに今回の上映の特徴として、夕方など限られた時間帯のみに上映される作品(端地美鈴、前田菜月、夏池風凧、福田真知)やリアルな時間と連動する作品(山田麻美)など、実験的な試みも行われる。映像の時間と現実の時間が合ったり、この場でしか見られない映像空間を形成するのである。timelakeの2つの会場での上映・展示を通じて、私たちはいくつもの「時間」を知覚・経験することになるだろう。すべての映像を見ることはできないとしても、これまでとは異なる時間を知覚・経験する機会となるに違いない。

そもそも歴史を遡れば、映像は専用の場所で上映されてきたわけではない。映画が初めて観客の前で上映されたのは、1895年12月28日にパリのグラン・カフェでリュミエール兄弟が行った有料上映会である。それ以後も映画はカフェを始め、公会堂や教会、ホテル、学校、野外などさまざまな場所を借りて上映されたのである(常設の映画館は1905年にアメリカで誕生する)。つまり、映画・映像を日常的環境で見ることは、映画史の初期から始まっていたのである。

1953年に放送開始したテレビも一般家庭に普及する以前は、繁華街や駅、百貨店、公園などにテレビ受像機が設置され、プロレスや大相撲などのスポーツ中継に観衆が集まったという。映像は映画館という専門の上映設備を整えていくと同時に、人々は街頭で映像を見てきたのである。

そして街頭テレビは大型化していく。1980年4月には、東京・新宿にスタジオアルタ館がオープンし、壁面に世界初の街頭ビジョン「アルタビジョン」が設置されたのである。90年代に入ると、1998年に有楽町の「マリオンビジョン」、1999年に渋谷駅ハチ公口スクランブル交差点の商業ビルに「Q's EYE(キューズアイ)」が設置される。以後、街頭の大型ビジョンによる映像放送は各地で日常化していくのである。

映画・映像、テレビは、かつて街頭や日常的・公共的な場所で上映・鑑賞されることで普及・促進していった。「timelake」の大型ビジョンでの上映展示はまだ実験的な試みかもしれないが、時間や映像の新たな可能性を未来に広げる始まりとなるはずだ。

1979年東京生まれ。2004年 多摩美術大学美術学部芸術学科卒業。2014年 立命館大学大学院先端総合学術研究科修了。2008年～2011年までアートウェブマガジン「カロンズネット」にライター・編集(2010年より編集長)を務め、2012年より現職。関西を拠点に美術批評、キュレーション、美術における地図表象、近代の鳥瞰図研究などを行なっている。

柵瀬 茉莉子 SAKURAI Mariko



幼い頃、祖母が刺繍をするその手もとを目で追いかけることが好きでした。時と共に変容していくモノやコトのはかなさに魅力を感じ、布や糸などの繊維素材と木を「縫う」などの実験と発表を続けています。

I constantly experiment with sewing onto wood using various fibrous materials such as cloth and string. My present artworks reflect my fascination with fleeting objects, which transform over time.



<http://marikosakurai.jimdo.com/>

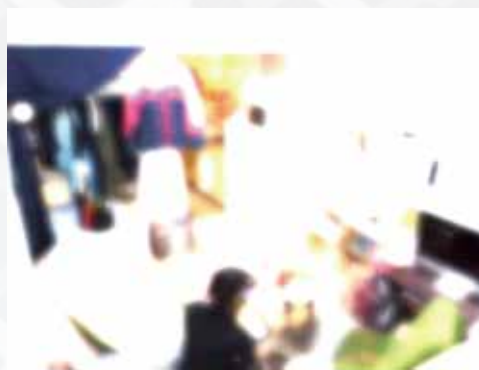
1987年 神奈川県生まれ。2012年 筑波大学大学院芸術専攻クラフト領域修了。2010年 徳島LEDアートフェスティバル、会津漆の芸術祭に参加。2011年 日本文化芸術機構よりU35サポートアワード受賞。主な個展に2011年「木を縫う」(ギャラリー・パリ・横浜)、2013年「UNDER35」(BankART Studio NYK・横浜)。2013年「大地を包む」展 越後妻有里山現代美術館、岐阜おおがきビエンナーレに参加。

柵瀬は木片や年輪に糸で刺繍をしていく作品を発表している。年輪はその木の生きてきた年月であり、その年月に対して、柵瀬の刺繍という、具体的な「私」の時間をひと縫いと縫い、素材の抵抗を感じながら重ね合わせてゆく。その作品は独特の時間を宿す。

林 葵衣 HAYASHI Aoi

Picture of the room

2min34sec 2015



時間は伸縮している。川のようにどこまでも流れ続けながら、1枚の写真の中にも存在する。時間の流れはyoutubeスライダーのように一定方向に限定されたものではなく、上下左右、手前から奥など様々に変化する。定点撮影した写真をスライドショー形式で再生すれば、奥から手前へと流れる。本作品は自室に2時間に一度シャッターを切るカメラを設置し、約3ヶ月半(2014/10/1 - 2015/1/21)間撮影した写真を時系列に並べ2分弱に凝縮させた映像である。出来たものを見返したとき、まるで抽象的な絵が動いているようだった。

Time is elastic.

It exists in a flowing river and also in a picture.

The flow of time can't be limited to one direction like a slider moving on a youtube screen.

The direction can change to right, left, up, down and even deeper.

Arrange pictures taken by fixed point photographing in a sequence and play like a slide show.

You can see the time coming up from the inside of the pictures.

This work is a 2 minutes movie that I created by gathering pictures of my room in chronological order.

The pictures had been taken every 2 hours for about 3 and a half months by a camera fixed in one point.

When I watched my work, it was as if an abstract picture was moving.

one scene -2011/3/12-

3min37sec 2011



一見、ただの砂嵐に見える映像だが、水面、空、撮影者がカメラを持って地面を撮影した、3つの映像が重なっている。目を凝らしてみると、雲や水面の波紋、撮影者の服や足等が見えてくる。時間軸の異なった光景を一つの画面に同時に映せるのは映像ならではの機能である。

<http://hayashiaoi.tumblr.com/>

1988年、京都出身。2013年 京都造形芸術大学大学院 芸術表現専攻 卒業、京都市リノベーションアトリエ つくるビル入居。主な個展に「Public Score」2014(つくるビル・京都)「OverLay」2013 (gallery near・京都)「RE 」2011(C.A.P. STUDIO Y3・神戸) 主なグループ展に「Kyoto Current 2013」(京都市美術館別館)「ULTRA 006」2013(青山スパイラルガーデン・東京)など。現在、京都在住。

林葵衣の作品は、繰り返し同じ事を繰り返すことにより作られる。同じ動作をしても、身体やインクや気候や様々な状況は変化してしまう。つまり、林の作品は揺れ動きながら刻々と変化する時間の記録ともいえるだろう。

前田 菜月 MAEDA Natsuki

【新風館】

Aquarium

3min48sec

2015

目の前のたくさんの光。通り過ぎて行く人、水槽の中の魚。
経験、記憶、認知はバラバラのまままで同じ光にいる、いた。

HAVE A NICE TIME HAVE A GOOD DAY.



1988年 神戸生まれ。2014年京都市立芸術大学大学院漆工専攻在学中。主な個展に「しんどろ／うんどろ」2013(KUNST ARZT・京都)。主なグループ展に「WORK IN MEMORY」2014(@KCUA,Horikawa housing complex)、「意識の変容／無意識の物語」2013(大阪中央公会堂)などがある。FELDSTARKE INTERNATIONAL 2014に参加(滞在先エッセン、マルセイユ)

前田は貧乏ゆすりや風で揺れぶつかり合う葉っぱなど日常の中の振動から、背後にある大きな振動に気づかせる。前田の日常からつながる大きな感覚や視点を公園のような新風館で提示する。

上野 千紗 UENO Chisa

【新風館】

muscle contraction

180sec

2015



幼少時の女の子、バレエを踊る女の子たち
彼女たち個人の世界を映像として記録する

少女の指先、つま先
日常生活では見ない筋肉の伸縮、動き

数台のカメラを使用しそれぞれの角度から記録する
まだ成長期である彼女たちの身体の動きを
一秒、一秒映像として時を刻み込む

誰でも映像を簡単に記録することが可能な時代に
ホームビデオとは違う角度から彼女たちを記録する

<http://uenochisa.tumblr.com>

1988年生まれ。2014年 京都嵯峨芸術大学短期大学部研究生修了。主な個展に「FRONTIER」2013(KUNST ARZT・京都) 主なグループ展にArts@Rissei(元・立誠小学校)2010、神戸ビエンナーレドローイングプロジェクト(神戸)2013などがある。

上野の作品は可視化されない省略されてしまう部分について意識を向けさせてくれる。また、感熱紙のドローイングが内包するレイヤーというキーワードも気になる。それらがどう映像としてたち現れるかがたのしみである。

寺岡は独自の方法で世界をはかろうとす作家である。寺岡が“timelake”というコンセプト(複雑さを前提にしたような)をどのように解釈し、どのようにアプローチし提示するかがたのしみである。

【新風館】

寺岡 海 TERAOKA Kai

アーティストの寝ている姿を撮影する 12min18sec 2015

「夜、眠る前に録画を開始し、起きたら停止する。私は自分自身にコントロールできないことに対して興味があります。今回は自分の知らない時間に対して作品を制作しました。_そうやって自分の知らない自分の時間を作品にすることで、自分の外側にある時間や価値観について考えることができるのではないかと思います。」



1987年 広島県生まれ。2012年 京都嵯峨芸術大学油画分野卒業。主な展覧会に「世界と私のあいだ」2012(KUNST ARZT・京都)、「無限の数え方/How to count infinity」2013(KUNST ARZT・京都)、「未来の途中-美術・工芸・デザインの最新12人展-」2014(京都工芸繊維大学 美術工芸資料館・京都)など。

11

岡本 光博 OKAMOTO Mitsuhiro

【新風館】

the origins 1min50sec 1999-2014

「the origins」は、1999年に大阪複眼ギャラリーの個展で発表した「2014 explosion(1999)」という自身の作品のリメイクです。その作品においても、複数の映画の爆破シーンとドラムパターンによる構成でしたが、「the origins」では、よりシンプルなロックビートです。

The video “the origins” is a remaking video of the artist’s own work “2014 explosion” in 1999. “2014 explosion” consists of the blast scenes of several movies, sounded with drum patterns. It was exhibited in the solo exhibition at FUKUGAN gallery in Osaka, 1999. In “the origins”, the sound is refined to much simple and solid.



<http://okamotomitsuhiro.com/>

京都生まれ。滋賀大学大学院教育学修了。1994-96年アート・スチューデントズ・リーグ・オブ・ニューヨーク(USA)に在籍、1997～1999年CCA北九州にて研究と制作を行う。2001年からドイツでのレジデンスを中心に活動(インド、スペイン、ほか)。2004-06年台湾・沖縄を拠点に活動。2007年からは京都を拠点に作家活動とともに京都市内にギャラリー「KUNST ARZT」(2012年から)を運営。

岡本は、映画の爆破シーンを世界の発生に見立てた作品を発表する予定。炎はエネルギーでもあり、生命を奪うものでもある。最近の映画の爆破シーンは、CGを駆使してリアルに描写されてはいるが恐怖を覚えることや魅了されることは少なくなったように思う。その、知恵以前の動物的本能に触れるような映像をパブリックスペースで上映する。

10

【新風館】

山田 麻美 YAMADA Mami

time condensation 1min16sec 2015

時間は空間として分割されている。人はいつも決まりきったやり方で、それぞれとを繋ぎ合わせずにはいられない。



山田の作品をみると、すでにあるもの(自分を取り囲む世界のようなもの)を、分解、再現、可視化 定着、抵抗、、、することにより自分について考察しているようにも思える。大きな外側”すでにある時間”も彼女にとって大きなテーマだといえる。

1987 東京都生まれ。2012 京都造形芸術大学大学院芸術研究科 修士課程 修了。個展「window」(2011,C.A.P.)、「some times」(2011,workroom)、「nog」(2012,prinz gallery)、「トロウ」(2012,CAP)、「by night」(2013,KUNST ARZT)。

小沢 裕子 OZAWA yuko

サーフィン

3min3sec

2011

「わたし」は擬人化された雪や猫のことなのか、声の主である人物のものなのか、それとも文字が自意識を持ち始めたのか、あるいはそれを見ることの出来る鑑賞者である「わたし」の事なのか。「わたし」とは他の誰でもないこの自分の事を指しているはずなのに、誰にでも同じように当てはまってしまう言葉である。「わたし」という言葉が主人公の小説を読んだり、歌詞に「わたし」というフレーズ出てくると、我を忘れて他者である「わたし」に憑依してしまう事がある。更には固有の名前や物語を持つ身体を伴った自分を忘れ、全てを見渡す神様にでもなったような気分になる。それは視点主の不在であり、見られる事なく見るとい状態である。そこからふと我に帰った瞬間、自分が自分の体で生きているという事がじりじりと感じられる。そして自分という主体がなければ、我を忘れる事もできなかったし、世界を知覚する事も出来ず、全てはなかったも同然である事に驚きを感じる。



13

『"Who I Am" by Bethany Joe (Original Song)』 3min23sec 2014

『ARR: You Say (Original) - Charles Village Festival 6/2/13』 3min43sec

『A Brief Opening-An Original Piano Piece-Free download』 2min50sec

"who I am"というタイトルはyoutubeで偶然見つけた動画のタイトルである。それは遠い異国の無名の少女が自作のオリジナルソングを歌っているという、クリエイティブコモンズ(本人が他者の二次使用利用を許可したもの)の付いた動画である。私はその見ず知らずの少女の歌に対してミュージッククリップを作り、再び同じタイトルを付けてyoutubeに返還した。手紙を付けた風船を飛ばすようにして投稿したその動画は、いつか彼女本人の元へ届くかもしれない。この作品は私の承認欲求を昇華するものとして機能している。きっかけは最近facebookをはじめたことである。今さらながらではあるが、私はその中毒性に圧倒された。友人の数やいいね格差など、他者との関係性に依存してしまいやすい一面を充分に孕んでお

り、まさしくそこは我々の承認欲求が育ちやすい世界になっていたのである!この依存と欲求を終わらせる為にはいくつかの方法を見つけ出した。①他者からではなく超越者からの承認を望むこと ②独我論的な世界に住んで承認される必要をなくすこと ③承認されることよりも他者を承認すること この3つは相互性があって決して異なる手段ではないと思っているのだが、今回はとりわけこの③を適用している。他者から承認されることに依存するのではなく、逆に私が他者を承認してしまうことで私が救われるのだ。私は今まで、誰がどんな目的でアップしたのかもわからないインターネット上に点在している映像をサンプリングするなどの作品を制作してきた。インターネット上には膨大な数の動画がアップされており、私がおの全てを見ることはできない。しかし誰かに見つけられることを待っている囁かな個人の動画を探したいと思った。まず、なるべく再生回数が少なく、無名であり、私が利用しているPCの検索エンジンの上位からなるべく遠い動画を探した。そして見つけ出した動画に捧げるビデオを制作したのだ。役者を使って歌を暗記してもらった。役者はその動画を何度も見て覚え、その動画主がどのような心情で歌っているのかを推測したり、他にどのような動画を上げているのかを調べるなど思い入れが強く、私は嬉しかった。私自身もその歌をiPodに入れて持ち歩き、ついには無意識に口ずさんでしまうようになった。この展示の鑑賞者は、オリジナルではなく作られたイメージを先に見ることになる。展示会場からリンク先を通じてやっとオリジナルのイメージに辿り着くという順番になるため、本来の動画の再生方法とは異なるかもしれない。例えば、『楽譜が同じでも演奏者によって曲の感じが異なる』というのはよくあることだが、『音と同じでもそれに付くイメージによって曲の感じが異なる』ということもあるかもしれない。しかしどちらにせよ、リンク先にアクセスされる度に再生回数は増えてゆき、本人のもとへ確実にフィードバックされてゆくのである。



<http://pa03040yo.web.fc2.com2>

1984年 千葉県生まれ。
2009年 武蔵野美術大学大学院造形研究科美術専攻油絵コース修了。

小沢の作品を観ると本当に軽やかにふわっと宙に浮かぶような感覚を覚える。彼女の映像作品は時間や意識を軽やかに越えていき、さらに映像の持つ質感さえも超えてゆく。

個別のまぼろし

the individual phantoms

4min50sec 2015



印象的だった光景をもう一度見ようと同一場所を訪れたら、
そんな風景はなかったということがたまにある。

知っているようなことも見たものも記憶の一部に過ぎないが、
見間違いの景色を辿ると、自分にとって馴染みのものと、
たくさんの人にとって典型的なもの、象徴的なものが連想できる。

この映像は、記憶にはあるが実在しない光景を、
見間違えた場所の一部や連想されたものをコラージュして再現したもの。
それぞれの場所で光が変化し風が吹き、作り上げたワンシーンは分裂していく。

1984 静岡県生まれ。2009 京都市立芸術大学大学院美術研究科漆工専攻修了。

夏池の作品を見ていると、記憶の不確かさに気付かされる。記憶はまさに湖であり、時系列では図れない。記憶を溜め込む細胞でさえも更新されていく。その湖の中で生成されたイメージは、その瞬間にすでに存在し、すべては本当であり、すべてはウソであるともいえる。

つかもと やすこ TSUKAMOTO Yasuko

On the Hudson

2min27sec

2014

Counterclockwise

3min42sec

2013

Dawning

3min3sec

2014



私達の認識する力、感覚と思考のつながりを疑いながら過去のTime pieceでは、在る筈なのに眼には見えない時間と計られる時間の差異を具現化しようとしてきました。近年、あるがままの時間を感じることで具体性の世界から、こだわり続けてきた五感の再認識、あるいは不確かさの再認識を体験できるのではないかと考えています。

2002年 Pratt Institute Graduate School of Art, M.F.A. 修得
インスタレーション、映像からアーティストブックまで様々な形態の作品を制作。

つかもとは、早くから映像作品を制作している。今では誰もが気軽に動画編集(エフェクトをかけたり)でき、タイムラグの少ない動画処理に慣れている。しかし、時間を変える(画面の中だとしても)ことは、特権的で恐ろしく過剰なことではないだろうか? ”待ち” ”見つめる” 近年の作品を上映する。

藤安 淳 FUJIYASU Jun

【新風館】

Y氏の場合

20min55sec 2015



「時間」について深く考えているとき、目の前にかつて吃音を悩んでいた友達がいた(そして、今でも吃音である)。国立障害者リハビリテーションセンター研究所のHPによると、吃音(きつおん、どもり)とは、話し言葉が滑らかに出ない発話障害のひとつであるとされており、その特徴的な非流暢(滑らかに話せない)は以下の3つのどれか1つ以上が見られることである。

- 音のくりかえり(連発) ex.「か、か、からす」
- 引き伸ばし(伸発) ex.「かーーらす」
- 言葉を出せずに間が空いてしまう(難発、ブロック) ex.「・・・からす」

つまり、吃音の方と話していると、普段の会話の流れとはまったく違った「時間」が流れていることに気づく。その世界では、時間の「溜まり」、「切断」、「拡張」、「消滅」が軽やかに行われていて、「時間」という概念は、左から右へと一方向に流れるタイムラインのイメージだけでは捉えられないのだということを改めて思い知らせてくれる。これは全く忌み嫌うものでもなんでもなくて、とても素晴らしい個性のひとつだ、と僕は思う。そんな魅力的な「存在」の映像化に挑戦してみたいと思った。とても近くに、吃音で、しかもそれを自分の個性として昇華しようとしている友達がいたから。



【KUNSTARZT】

僕は双子としてこの世に生を受けて今まで生きてきた中で、向き合わざるを得ないいくつかの問いに直面してきた。ひとつは、自分自身が双子であるということ意識する必要があるのかどうか。またひとつは、自分に似た存在が知らないうちに自分として認識されている世界があることへの恐怖感とどう対峙すべきか。そしてさらには、第三者から幾度となく見比べられるような眼差しに晒される中で自分の「個」としてのアイデンティティをどのように確立すべきか、という問いである。果たして「他の双子たちはそれらとどのように向き合っているのだろうか」。その答えの一端が掴めれば良い、と思った。そして、【双子】というフィルターを通したその先にあるものを確かめたい、とも思った。

<https://jun-fujiyasu.squarespace.com/>

1981年 東京都生まれ。2008年「第1回塩竈フォトフェスティバル写真賞」大賞受賞。2013年「御苗場vol.13関西 エブソン賞」受賞。2014年「in」(between.ShaShin Book Award 2014 優秀賞)受賞。主な個展に、「DZ dizygotic twins」2007 (Gallery H.O.T・大阪)、「DZ dizygotic twins」2009 (ギャラリーPIPO・東京)、「empathize」2012、2014 (The Third Gallery Aya・大阪)。主なグループ展に、「第3回 ディアロッキング展」2012 (海岸通ギャラリー・CASO ・大阪)、「neo-824 宇山聡 藤安淳 福田真知」2014 (The Third Gallery Aya・大阪)。

藤本 由紀夫 FUJIMOTO Yukio

【新風館】

fujimoto yukio The Tower of Time

58sec 2009

コンセプトペーパーを読んでいて思い出したのが2009年イギリスのバーミンガムで行った展覧会でした。バーミンガムのIKONギャラリーが運営している19世紀に立てられた塔を丸く使ったインスタレーションで1111個の時計を展示したものです。帰国してすぐ知人に凄い音ですわねと言われ不思議に思ったのですが知人はyoutubeで見たと言うのです。まったく知らない人が展覧会の模様をコンパクトに編集してアップロードしていました。



注意深くって、見えなかったものが見えるようになる、きこえていなかったものがきこえるようになる、気付かなかったことに気付くことは、重要なことだ。藤本の作品はそれを気付かせてくれる。そんな藤本の映像を一般の方々が行きかう商業施設で上映する。

藤安は自身も双子であり、双子であることアイデンティティを追い求めている写真作家。双子は同時に生命の時間がスタートする。そのような同時に発生した(細胞をともにした)存在が平行して、あるいは交差しながら、時間を進めていくことは実に稀で不思議なことだと思う。

ある対象について分析しようとするとき、近代的主体としての私たちは、まずその対象を諸部分の集合体として捉えるよう訓練されている。腑分けし、区切り、分節化する。オーケー、写真は好都合だ。過度に似ていること、わずかに異なることを同時に明瞭に突きつけてくる。アイデンティティ。ぴったりの言葉だ。そこで私たちは安心感を得るのだろうか。人はそれぞれが異なると。そこで私たちは生命の神秘を感じるのだろうか。「私たちは双子なんです」「本当、目元なんかそっくりね??」いずれにせよそれらの感想はあらかじめ先回りされたものではないだろうか。そのような確認作業に藤安の写真の強度を求めれば、それはいかにも退屈であろう。むしろ翻ってこう考えてみてはどうだろうか。双子の差異と、今その写真を見ているあなたとの差異は、どれほどののだろうか。

長谷川 新 キュレーター
HASEGAWA Arata

Remember me 5min13sec 2013

くり15周年記念シングル「Remember me」のミュージックビデオ。
端地美鈴 and CHIMASKI として制作。

ひとりの女の子の日常とその一生を音楽の世界観とあわせてアニメーションでつづった。

Quruli 15th Anniversary single "Remember me" music video. Production as Hashiji Misuzu and CHIMASKI. To meet one of the girls everyday and its the life and world of music I was spelled in animation.

5:00 evening 2min20sec 2014

今ではほとんど使われなくなった、古いビルで働いていた女性をモチーフにして、町の夕方の5時を舞台に、こどもの頃の思い出などをアニメーションとした。

Now no longer likely to be used, in the motif of women who worked in the old building. Set in 5:00 in the evening of town, I was like memories of childhood and animation.

Television 48sec 2015

テレビの電源を入れる。夜7時からのプロレス番組にチャンネルをあわせる。
見事なスープレックスだったと、明日の誰かとの話題になる。
遠く離れた場所での昨日の出来事が、明日の誰かとの一部になることは、過ぎたはずの
timelineがtimelakeになる瞬間である。



1990年京都府生まれ。京都造形芸術大学 情報デザイン学科 イラストレーションコース卒業。卒業制作として、紙・鉛筆・消しゴム・消しカスを使用したアニメーション「lost and found」を制作後、くり15周年記念シングル「Remember me」のPVを制作。2013年にKUNST ARZTにて個展「over and over now」を開催。

ニューウォッチング 2014-2015

偶然視界に入り、結びついた視線の動きを集めたアニメーションです。毎日たくさんのもをを目にするのに、そのほとんどを覚えていない。見えているけれど見ていない、いつも通り過ぎてしまっている部分に着目しました。

This work is an computer animation which I collect natural and artless movements of one's eyes. We see many things every day, but we don't remember almost all things. I'd focused on things which we usually pass without looking visible things.



1990年 京都府生まれ。2013年 京都造形芸術大学 情報デザイン学科 イラストレーションコース卒業。
個展「ラジオ体操第一」(KUNST ARZT/京都)

端地の作るアニメーションは、一枚の紙の上で完結する。鉛筆で描いた像は消しゴムで消されるが、消しカスとなって像になる。その消費しない映像作品は、折りや生命のようなものの質感に似ている気がする。

森川は捉える。作品の、その速すぎて処理できないビジュアルを見ると、身体で理解している部分もやはり多いのだと再認識されられる。また、動体視力違いでも、世界の見え方が違うのだろう。

【新風館】

吉田 周平 YOSHIDA Shuhei

Now

3min 2015

常に動き続け、常に変わり続け、常に流れ続ける。
ある流れに対して、別の流れが同時に関係し合いながら存在する状態。



いろいろワールド

15sec 2004

寺の門の下に台に置いたテレビを設置。設置した場所と同じ場所で撮影した、日用品が宙で舞う瞬間ををつなぎ合わせた映像を再生。


<http://yoshidashuhei.com/>

1980年石川県生まれ。2004年成安造形大学 造形学部デザイン科写真クラス卒業。身近なものに手を加えたり、簡単な方法で、物や空間の意味と感じ方を変化させる作品を制作。「1floor 2008 No potato of name」(神戸アートビレッジセンター/兵庫)、「ラジドク!」(KUNST ARZT/京都)などに出演。

【新風館】

笹岡 敬 SASAOKA Takashi

WATER 2015

3min46sec

2014



長年素材として扱っている水ですが、未だにそれを素材として扱いきれません。どのように扱ったとしても水は私の制御しようとする意志からこぼれ落ち、単なるイメージとして拡散してしまいます。今回は単純な水の落ちる映像を時間軸の中でシンプルに加工しました。それでもやはり水は水のままでした。

2014年「個展」CAS/大阪
2013年「個展」+ Gallery mini + N-MARK B1/名古屋
2012年「日韓交流展 HistoricalParade:Images from elsewhere」
ソウル市美術館分館/ソウル

<http://cas.or.jp/>

水は、環境により形態を変え、霧のように環境にもなる。地でも図でもある。水や光を使う笹岡の作品をみていると、感情や記憶以前の感覚の奥のほうに触れられているようだ。

21

吉田は、日用品を題材としよく扱う。日用品が宙で舞う瞬間、日用品は非日用品の側面を見せる。重力を切り離すことで、日用品の文脈を切りはなされたそれらは、地球時間ではなく宇宙時間に属しているともいえる。

大坪 晶 OTSUBO Akira

【新風館】

The Yearbook・2014-2015

3min53sec 2015



卒業アルバムの写真群は、類型化された人間のサンプルです。同じフォーマット、髪型、服装の集合写真を重ね合わせることで、人間の記憶のあり方を問う作品としました。

<http://akiraotsubo.info/>

2013年ブラハ工芸美術大学(AAAD)修士課程 コンセプチュアルアート学部 写真学科修了、2011年東京芸術大学 修士課程 先端芸術表現科修了。主な個展に2013 Munkat Gallery [ドイツ・ミュンヘン] 2013 Behal Fejer Institute [チェコ・プラハ]。

22

花田 恵理 HANADA Eri

【新風館】

20の夜 5min 2012

らくがきをして、窓ガラスと蛍光灯を割って、修復をした。



花田は「安定した現実社会を混ぜていく」作家である。その様は、ある種、自然的(エントロピーの増大、リベンジ)にも思え、彼女の作品は公共の場でより力を発揮するように思う。

1991 静岡県生まれ。2014 成安造形大学 芸術学部芸術学科美術領域現代アートコース卒業。主な展覧会に、ゆとり主義2012(成安造形大学ギャラリーキューブ/滋賀・GALLERY1963/大阪)、個展 Open spaces2013(KUNST ARZT/京都)、日韓交流展「add me! carry more」2014(KEPCO ART CENTER/ソウル)などがある。

大坪は、「写真」を使いながら記憶のイメージへアプローチする。人々の記憶のアペラージュは、なぜ存在するのだろうか?大坪の作品を見ていると、ありふれた正義や道徳感さえも不確かに思え、それと同時に、記号化されたものたちへの愛おしさのようなものを感じる。

林 勇気 HAYASHI Yuki

【新風館】

記憶をひそませる

9min16sec 2015

記憶をそれぞれの場所にひそませることで、新しい関係と意味は生まれ、また時間の経過と共に失われいく過程を作品にしています。



The layers of everything

5min 2011

私は膨大な量の写真を撮影しPCにとりこみ、きりぬき、重ねあわせて制作しています。本作は重ねあわせ映像がたちあがっていくことを可視化した映像作品です。



http://andart.jp/artist/hayashi_yuki/profile/

97年より映像作品の制作を始める。国内外の美術展や映画祭に出品。近年の主な展覧会に2011年 個展「あること being/something」(兵庫県立美術館)、「HUMAN-FRAMES」(Kunst im Tunnel, ドイツ)、2013年「あなたがあほしい i want you」(WELTKU NSTZIMMER, ドイツ)など。

林勇気の作品はデジタルだけれどアナログな感じがする。それは、素材となる「もの」を実写撮影しトリミングしているからであろう。「もの」たちはそれぞれの時間をまとっているから、編集され画面上に現れてもそれぞれの時間が勝手にめぐっているような印象を受ける。

橋本 玲美

HASHIMOTO Remi

【新風館】

燃える平原(The Burning plain)

5min 2014

私たちは、「燃える平原」を走り抜けなければならない。心を燃やすように必死の思いで走り、この世界から逃げなければならない。



悲しみのためのテスト

15min 2012

「世界で一番不幸な人」のイメージを想像してもらい、屋上で世界中の不幸な人たちを代弁してもらおう。不幸を演出するとはどのようなことなのだろうか？
過剰に演出された「悲しみ」を見ると、本当は何を見ているといえるのだろうか。



<http://rehmto.tumblr.com/>

1991年 東京生まれ
2010 文化学院デジタルデザイン科卒業
2013 阿佐ヶ谷美術専門学校イメージクリエイション科卒業

井上 裕加里

INOUE Yukari

【新風館】

We keep on drawing lines

2min21sec 2015

今作は、国境線に注目する。世界には、自然地理学的な障害の境に存在する自然的国境と、人為によって定めた人為的国境が存在する。この人為的国境は、条約、経線、緯線、民族、人々の価値観や思想の相違による争いによって引かれ、現在でも変動し続けている。しかし、我々は何と何の違いを以って「私たち」と「私たち以外」と線引きをし、国境として隔てているのだろうか。今作では、国境線を時間の流れの中で振り返り、その動きを把握することで、「私たち」と「私たち以外」の境界線とは何であるのかを考察したい。



<http://yukarii745.wix.com/inoue-yukari-works>

1991年 広島生まれ。2014年成安造形大学 芸術学部芸術学科美術領域現代アートコース卒業。
個展「It's a small world」(Kunst ARZT/京都)2013

歴史を木に喩えると、井上は時間の流れのなかで、木の幹から枝先までの成長する過程でずれてしまった何かを、丁寧に採取、解釈し提示する。その姿勢に好感をもつ。パブリックスペースで提示することにより、何かが少し変わる事に期待する。

橋本の「悲しみのためのテスト」はまるでドラマの撮影現場を横で見ているようで、現実とフィクションの物語の時間、その時間を見る時間、と複

のテスト」はまるでドラマの撮影現場を横で見ているようで、現実とフィクションの物語の時間、その時間を見る時間、と複

檜木野 淑子 NARAGINO Yoshiko

【KUNSTARZT】



そこに立つ、存在する 土師山公園(木津川アート/京都)

陶土を素材として制作を行っています。

ものの持つ空気感やそれが存在することによって感じ取ることが出来る空間の印象に興味があります。その空間の印象の変化を生み出すためには何が必要か、どのような立体に可能なのかを探っています。

<http://yoshikonaragino.com>

1985年大阪府出身 2010年京都精華大学大学院芸術研究科博士前期(陶芸専攻)修了。【主な個展】 檜木野淑子展 2010(ギャラリーマロニエ/京都)、「そこに立つ、存在する」2013(GALLERY wks/大阪)。【主なグループ展】 The second group Project Network 2012 Exhibition 2012(GALLERY Guldagergaard/デンマーク)、木津川アート2014。淋派400年記念 新鋭選抜展 淋派の伝統から、RIMPAの創造へ(京都文化博物館/京都)、第18回 岡本太郎現代芸術賞展(川崎市岡本太郎美術館/神奈川)。

檜木野は細かい装飾の美しい陶芸作品を発表している。古代の遺跡の壁画は映像的。鑑賞者が歩き進みながら観ることにより頭の中で物語を紡ぎ解釈する。檜木野の作品を歩きながら鑑賞することにより、鑑賞者それぞれが物語を紡ぎだすことができるだろう。

芳木 麻里絵 YOSHIKI Marie

【KUNSTARZT】



Cloth#01・2012(photo OMOTE Nobutada)

写真、またはスキャナーでパソコンに取り込んだ画像をもとにシルクスクリーン技法を用いて、インクの層を何百回も刷り重ね制作しています。

インクの層が刷り重なって、二次元から三次元へ立ち上がってゆく過程は興味深く、立ち上がってくるインクの層はイメージでもありモノであるともいえます。

2.5次元ともいえるどちらともつかない存在を提示したいとおもっています。

<http://yoshikimarie.com/>

1982年 鹿児島県生まれ 京都市立芸術大学大学院 美術研究科 版画専攻修了(2008年修了) 主な展覧会 2009.09 『THREE DUBS』 神戸アートビレッジセンター | 兵庫、2010.04 個展 SAI Gallery | 大阪、2013.07 『ART COURT FRONTIER 2013#11』 ART COURT Gallery | 大阪、2014.07 『ART OSAKA 2014』 SAI Galleryより個展形式で参加

芳木の作品は、そのビジュアルの美しさもさることながら、絵画が可能であることで実証されているインクの特異性”物質感のない物質”が積層していて、存在的に妙なポジションにあるモノである。レイヤーの積み重ねによって出現する、立体(物質)でもありながら現実の時間と一線を引いて存在しているような作品は独特の存在感を持つ。

室井 絵里 MUROI Eri

インディペンデントキュレーター

timelake:時の湖をめぐる

Facebook、Twitter、Lineなどの画面で流れていく情報の時系列をTimeLine / タイムラインという。

パソコンやスマートフォンの画面に横書きで、縦方向にスクロールして行く文章や画像情報の流れだ。

かつて、パソコン通信などのパソコンの画面でやりとりされていたのは、文字情報だけだった。その頃は、手紙の便せんやレポート一枚一枚読んで行く感覚で画面の文字を辿った。

タイムラインの横書き、時間軸は縦方向という感覚は、その頃の名残なわけだ。日本語でも、文字を入力するという時には、縦書きは馴染まないらしく。今ではすっかり原稿を書くのも、横書きの入力となってしまった。

一方縦書きにして用紙一枚で完結しない場合、どう広がるかという巻き紙形式の横方向の時間感覚に広がるわけだが、この場合、広げれば一応一枚の紙としてもまとまるという予測がたつ。

しかし、横書きで時間が縦方向に流れた場合エンドスクロールみたいに、ぐるぐるまわるような気がするのだが。実際にフェイスブックなど、現在から過去に見ているはずなのに時間が過去に戻るのではなくシャッフルしたり、同じ人の同じ日記がでてきたりするというにもなっていてこれはシステム上の余計なお世話だと時々思う。そのように縛られた閉じた循環というのは時に息苦しい。

ツイッターの場合は、過去にたどるタイムラインに縄跳びの輪に飛び込むようにどこかの時間にジャンプする感覚が強い。

いわゆるタイムラインというのは、本質的な意味ではタイムラインではなく個々人が暫定的に今見ているものをスクロールという行為によって時間という概念に結びつけているだけで、形は変わったとしても巻き紙の手紙はフェイスブックで、短い歌や文を矢に括り付けて矢を放つのはツイッターとか、新しい感覚のようで人間のやることや時間感覚のあらわし方そのものはさほど変化はしていないようにも思う。

従って、私自身はタイムラインによって新しく生じる時間感覚とか、逆に社会や人の感覚に与える悪影響なんてことはあまり気にしていないし、そこからものすごく新しい感覚が生まれてくるとも期待してもしない。

アーティスト福田真知が企画したこの展覧会のタイトルtimelake/タイムレイクは造語だが、この時間の感覚が湖に落ちてたまる、というか湖のどこかにある水の澱みと循環みたいなものとイメージできる。ちなみに、この言葉を検索してみるといまのところはローン会社や、アメリカのソルトレイクシティのことなどが出てくる。湖とか時間がローン会社に変容していく、このギャップは面白い。商業と消費の対象の街中の新風館のスクリーンに笹岡敬、藤本由紀夫、岡本光博らの映像作品がアトランダムに流されるらしい。一部作品をパソコンで拝見したが、これらがパソコンや美術の空間ではない場で、人が何の予備知識もなくふと目にしたとしたら、水や火や音が現象として純化された映像が人の意識の中にどのように入り込んでいくのだろうか。

また、一方KUNSTARZT会場では企画者福田真知の画像を絵の具を塗り重ねて作るように被写体を重ね合わせて作った映像作品や、樹木の時間を金糸で縫っていくような柵瀬茉莉子、カラフルな色彩と物語感覚溢れた陶土によるインスタレーションの植木野淑子、自身も双子であり双子であることで同時にスタートする類似しつつもそれぞれが確立した個である生命/双子の不思議を写した藤安淳、インクのレイヤーによって積み重ねられる立体と平面の中間に出現したような織物のような色彩と感覚の芳木麻里絵など。映像も手で作る作品も時間を重ねて丹念に作り上げていく若手作家たちの作品で構成される。

この展覧会の時期に京都ではPARASOPHIA/パラソフィアという京都国際現代芸術祭が美術館や市内各所で開催され、同時期にKUNSTARZTも含めて現代美術画廊は京都アートマップというイベントを開催中。アートは美術館から画廊に行ったり来たり忙しくなるはずだ。その中タイムレイクは静かに二会場に分かれるわけだが、そもそも湖へ時間のイメージを集約させたところで、実はすべての試みは水の流れが湖に流れ、また生まれだすようにタイムレイクという試みへと集約されるとイメージできるかもと思う。

timelake/小さな書き込みが炎上したり、リツイートやシェアされたりして波及したりするように、この小さな試みが、意外なところで大きく波紋を生むかもしれないという予感がする。時の流れが、実は私たちが認識しているような過去から未来へという一つの流れではないのではないかと、最近私は考えているのだが、過去が未来でもあり、未来が過去でもあるような渦が湖という底知れない見えない水の流れがどこから立ち現れてくる現象がタイムレイクとい試みによってみえてくるかもしれない、それを捉えられるかどうかは私たち自身によるのだろう。

1960年大阪生まれ。横浜在住。大阪芸術大学芸術学部文芸学科卒業。

同大学研究室副手を経て、京都梁画廊のディレクターなど。1987年BTの関西エリア展覧会評、新聞などに執筆。

91年頃京都ギャラリーすずきのイメージの新様態の作家選びをきっかけに、展覧会企画をはじめ。

第一回横浜トリエンナーレ・コーディネーター、前衛下着道展・鴨居羊子とその時代(2010/川崎岡本太郎美術館)展など。

timelake

平田剛志

タイムラインからタイムレイクへ。いま、映像はみずうみである。蛇口をひねれば水がでるように、映像はテレビやPC、都市や公共(交通)空間の隅々まで溢れている。かつて映像は「映画」を意味し、特定の日時・場所で見られるものだった。だが、いま映像は動画とも称され、PCやスマートフォンで視聴、投稿、編集し、美術館やギャラリーでは映像がループ上映される状況である。映像の終わりになき永劫回帰。かつて映画館やテレビが有した上映・放送の時間感覚は消え、映像の制作・視聴に始点も終点もなく、「The End」さえ出ないこともめざらしくない。さらに映像＝時間はレコーダーやハードディスクにみずうみのようにためられ、プールされるのだ。

タイムレイクをコンセプトに掲げた本展は、映像＝タイムラインという既存概念を塗り替えるだろう。さらに、このコンセプトは平面・立体作品にも適用されるという。なぜなら、タイムレイクは「みずうみ」というトポスを志向(思考)するからである。春の京都につかの間現れる「タイムレイク」は、映像を再考・再定義・更新する機会となることは間違いない。

※timelake-時間の湖- リーフレット(2015.1発行)より

30

21名の映像作品を野外大型LEDビジョンで上映。
12時間のプログラム上映。

2015年3月3日 | 火 | ー 6日 | 金 |
9日 | 月 | ー 13日 | 金 |

11:00 — 23:00

新風館
SHIN-PUH-KAN

新風館 <http://shinpuhkan.jp/>
京都市中京区烏丸通姉小路下ル場之町586-2



5名の作家による独自の時間を内包した作品の展示。

2015年3月3日 | 火 | ー 15日 | 日 |
12:00 — 19:00 | 月曜休み・最終日は17:00まで |



KUNST ARZT www.kunstarzt.com

〒605-0033 京都市東山区夷町155-7 2F
TEL: 090-9697-3786 e-mail: kunstarzt@gmail.com
155-7 Ebisu-cho, Higashiyama-ku, Kyoto, Japan 605-0033



VvK program/
アーティストプレゼン企画と題し、
アーティストが企画したグループ展を積極的に
行います。

テキスト 福田真知

01 2014年2月 プレビュー展示として
「行き来す 橋本玲美×福田真知」展
を開催。(ART SPOT KORIN)

02 2014年9月「プレビュー上映&トーク」
林勇気・吉田周平・福田真知を開催。
(ギャラリー揺)

03 2015年1月 新風館にて試上映。

04 2015年3月 timelake-時間の湖-
を開催。(KUNSTARZT・新風館)

05 2015年5月
インスタレーション&アーカイブ上映
(ART SPOT KORIN) ※内容は予定です。

・
・
・

31

<http://timelake.jp>
www.facebook.com/timelake

協力:

新風館

KUNSTARZT

Art Spot Korin

ギャラリー揺

GALERIE PARIS



井上 裕加里

森川 あいみ

松本 保

吉田 周平

Emura Koichi

Matsune Michikazu

Kamise Rui

岡本 光博

平田 剛志

金山 忠司

笹岡 敬

timelake-時間の湖-

キュレーション:
福田真知(VvK)

《新風館》

井上裕加里	上野千紗	大坪晶
岡本光博	小沢裕子	笹岡敬
つかもとやすこ	寺岡海	夏池風芽
端地美鈴	橋本玲美	花田恵理
林葵衣	林勇気	福田真知
藤本由紀夫	藤安淳	前田菜月
森川あいみ	山田麻美	吉田周平

《KUNSTARZT》

榎瀬茉莉子 橋本野淑子 福田真知
藤安淳 芳木麻里絵

《TEXT》

平田剛志 室井絵里 福田真知
長谷川新

【展覧会】

主催:

timelake実行委員会

会場:

KUNSTARZT

新風館

会期:

KUNSTARZT

2015年3月3日(火)~3月15日(日)

新風館

2015年3月3日(火)~3月6日(金)、
3月9日(月)~3月13日(金)

【カタログ】

編集・デザイン:

福田真知

印刷:

株式会社グラフィック

発行:

timelake実行委員会 (KUNSTARZT内)
605-0033 京都市東山区夷町155-7
155-7 Ebisu-cho, Higashiyama-ku, Kyoto,
Japan 605-0033

発行日:2015年3月3日

クラウドファンディングプラットフォーム
MotionGallery
クラウドファンディング

応援お待ちしております! 2015/01/20 00:00 ~ 2015/03/20 23:59
<https://motion-gallery.net/projects/timelake2015>